

マタイ8章5-9節 「権威の下にある者」

1A 新約聖書の百人隊長

1B 中風のしもべ

2B 十字架にいた兵士

3B コルネリウス

4B ユリウス

2A 「権威の下」

1B 服従

2B 責任

3A イエスご自身にある権威

1B 父なる神

2B 弟子たち

3B 教会

4B 指導者

5B 家庭や職場

本文

マタイによる福音書8章を開いてください、私たちの聖書通読の学びを続けます。三週間前になってしまいましたが、今回はイエス様が山上で説教を行われたところを読んだのを思い出してください。イエス様が、山の上でお語りになられたことばには、力がありました。権威がありました。知識を習得することではなく、自分自身が無になる。心を貧しくし、罪を自覚し、けれども神のあわれみにふれて、全てを捧げることを決意しないかぎり、聞き続けることはできないでしょう。つまり、イエス様が言われたように、「天の御国が近づいた」のです。イエスを王とする神の国が近づいたのです。この方に自分の意志を明け渡さないかぎり、この国の中に入ることはできません。

主が語り終えられた後の群衆の反応を見てみましょう。「7:28-29 イエスがこれらのことばを語り終えられると、群衆はその教えに驚いた。イエスが、彼らの律法学者たちのようではなく、権威ある者として教えられたからである。」権威ある者としてお語りになりました。8章は、その権威ある言葉が教えだけに留まらず、確かに力があり、確かに権威があることを示している箇所です。午後、一節ずつ学んでいきたいと思えます。もう一つ、群衆たちの反応に「驚いた」という言葉があります。聖書には、数多く神が行われている働きに人々が驚いている場面が出てきます。8章にも出てきます。イエス様ご自身も驚かれました。そしてイエス様が昇天してから、聖霊が弟子たちに下り、外国の言葉で神を賛美しているのを聞いたユダヤ人たちは、驚きあきれました。神が、事を行われる時には、驚きがあります。それは私たちの理解を超え、日常を超えるからです。私たちの生きている社会は、そうした驚きをなくさせています。今までのあり方を維持して、何の変化もない

ようにする。これが良いことだとされています。想定内だけのことにしたいと願っています。しかし、神は福音をもって私たちの具体的な生活に、変化をもたらしたいと願われています。

今朝は、イエス様がご自分の言葉の力と権威を現す五つの出来事のうち、イエス様ご自身が驚かされた信仰について学びたいと思います。百人隊長の信仰です、8章5節から9節までを読みます。「5 イエスがカペナウムに入られると、一人の百人隊長がみもとに来て懇願し、6 「主よ、私のしもべが中風のために家で寝込んでいます。ひどく苦しんでいます」と言った。7 イエスは彼に「行って彼を治そう」と言われた。8 しかし、百人隊長は答えた。「主よ、あなた様を私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ただ、おことばを下さい。そうすれば私のしもべは癒やされます。9 と申しますのは、私も権威の下にある者だからです。私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。』」

1A 新約聖書の百人隊長

1B 中風のしもべ

この後で、イエス様は百人隊長の信仰に驚き、ほめられます。「イスラエルのうちのだれにも、これほどの信仰を見たことがありません。」と言われます。癒しを行われるのに、手で触れるということもせず、ことばだけで行うことができると信じていたからです。また、イエス様の言葉の力、権威を、これほどまでに正確に把握していたので、驚かれました。実は聖書は、ここカペナウムの百人隊長だけではありません。他の箇所でも、百人隊長を新約聖書は、とても良いように描いています。



2B 十字架にいた兵士

イエス様が十字架に付けられて、息を引き取られるまでを百人隊長が全て、見ていました。総督ピラトが十字架刑の判決を出して、それを執行することを命じられた百人隊長です。もちろん彼が、実際に手を出すのではなく、自分の部下に命令を出して、全てのことを執り行うのですが、ゆえに一部始終を注意深く見ていました。こう書いてあります。「マルコ 15:39 イエスの正面に立っていた百人隊長は、イエスがこのように息を引き取られたのを見て言った。「この方は本当に神の子であった。」」彼が、全知全能のまことの神を知っていたか分かりません。ローマ軍は、その中でも多くの神々があがめられていたと言われます。けれども、地震が起こったり、空が暗くなったりし、これまで信じてきた神々とは、まったく異なる方だということをは認識したのでしょうか。「本当に神の子であった。」と言ったのです。

3B コルネリウス

そして先週、お話ししたカイサリアに駐屯していたコルネリウスです。ペテロの福音伝道によって、彼も一家も信じ、聖霊のバプテスマを受け、それから水のバプテスマを受けました。使徒 10 章 2 節に、彼の敬虔な姿が書いてあります。「彼は敬虔な人で、家族全員とともに神を恐れ、民に多く

の施しをし、いつも神に祈りをささげていた。」彼は異邦人でありながら、ローマ軍の中で普通に拝まれていたいろいろな神々、ギリシアのもあったでしょうし、ローマの神々もあったでしょう、それらを拝むのではなく、ユダヤ人の信じている天地創造の神がおられることを受け入れていました。そして、自分自身は改宗の手続きを取ってユダヤ教徒になろうとは思いませんでしたが、ユダヤ人に施しをして、神を敬っていたのです。

4B ユリウス

パウロが、エルサレムに戻って騒動が起こり、その後にカイサリアに監禁されていたけれども、彼がカエサルに上訴したので、囚人として船に乗せられてローマに向った時のことを思い出してください。使徒 27 章 1 節にこう書いてあります。「さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロとほかの数人の囚人は、親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡された。」ユリウスという百人隊長です。かつ、皇帝を護衛する親衛隊の百人隊長です。船が遭難した後に、パウロの指示に彼は従いました。初めは船長の言うことに従っていましたが、パウロが言ったとおりになったからです。そして、船が座礁してしまったので、兵士たちが、囚人たちがだれも泳いで逃げないように、殺してしまおうと図りました。もし囚人を逃したら、自分の命をもって償わなければいけないからです。けれども、「百人隊長はパウロを助けたいと思い、彼らの計画を制止して」とあります(27:43)。つまり、自分の命をかけてパウロを守ったのです。ここに、パウロの神を恐れている姿があります。

2A 「権威の下」

他にも何人か出てきますが、決して悪い人のように出てきません、むしろその信仰や神を恐れる姿はほめられるべきものです。実は、私たちに身近な人々もいます。沖縄米軍の人々、特に位が高い人でも兄弟たちがいます。高い位ですから、兵士にありがちな横柄な態度を取るのか？と思えばその逆で、とても謙遜な人が多いです。私たちの教会の群れ、カルバリーチャペルの仲間にも、教会で日曜朝早く、掃除をしている人たちがいます。その人たちが実は非常に、米軍では高官のような地位についている人だという話があります。

なぜか？それは百人隊長の言葉にあります。「私も**権威の下にあるもの**」ということです。武器を所持しているのですから、人々を支配し、虐げることさえできるはずなのですが、そのようなへりくだりができるのは、自分自身が権威の下にいることをよく知っているからです。百人隊長というのは、ローマ軍において「背骨」と呼ばれていたそうです。「兵の指揮統制をはじめ非戦闘時における隊の管理など、軍の中核を担う極めて重要な役割を果たし」ていたとのこと。また、「市民社会からも大きな敬意をもって遇される名誉ある地位であった。」とのこと。今で言えば、少尉あるいは少佐のような存在です。会社でいうならば中間職です。権威を持っているのですが、自分自身が権威の下にいて、服従しつつ、その権威を行使することを最も体得している人々です。

1B 服従

ローマの百人隊長は、誰に対して服従しているのか？もちろん直属上司である千人隊長ですが、究極には皇帝に対してです。王であるカエサルこそが主権者であり、自分はこの方に服従しているということを知っています。そしてその服従とは、全ての意志です。主人というのは、条件付きで従うものではありません。どんな時にも、どんなことがあっても、全身全霊を尽くして仕え、従います。自分の心の王座に、自分が座るのではなく、王が座っているのです。

2B 責任

それゆえに、初めて命令を出すことができるし、またその命令には権威があります。自分が出している命令は、自分自身から出たものではなく、皇帝からのものだからです。百人隊長は、「**私自身の下にも兵士たちがいて、その一人に『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをしろ』と言えば、そのようにします。**」と言っています。初めに、自分の上の権威に服従します。次に、自分に任されている者たちを見て、自分が治めている領域を見ます。自分が王に仕えている分、そこに広がる自分の責任範囲が見えてくるのです。

そしてこれが、イエス様が百人隊長の信仰をほめたことの所以です。つまり、私たちが服従するという生活を歩んでいるか？ということです。今は、人権が当たり前になっている時代です。選択の自由が当たり前になっている時代です。私は、人権も自由も神からの大切な賜物だと思っています。けれども、あくまでも主権者であられる神がおられるから、人権も自由も賜物であり、やはり神が王であり、イエス様が王なのです。人は、何かに従属しなければ生きていない存在なのです。ノーベル賞も獲得した人ですが、昔、ボブ・デュランというロック歌手が世界的に有名になりました。彼は、「あなたは、誰かに仕えているはずだ」という歌を歌いました。それは、彼がクリスチャンになった信仰から出てきた歌です。ローマ 6 章 16 節にあります。「あなたがたが自分自身を奴隷として獻げて服従すれば、その服従する相手の奴隷となるのです。つまり、罪の奴隷となって死に至り、あるいは従順の奴隷となって義に至ります。」

3A イエスご自身にある権威

神が人を造られた時に、命令から始まりました。園に生えている木々から、好きなように実を取って食べてはよいが、中央にある善悪の知識の実から取って食べてはいけない、食べたら必ず死ぬ、と言われました。命令の下に自分を置きます、服従します。けれども、人はその命令から出たいと願い、自分が賢くなろう、自分で判断して、自分で決めて、自分で生きていこうとしました。それが、罪の始まりです。そして、自分自身の感情や知性が神となってしまう、まことの天地を造られた神と、まことの主であるイエス・キリストを退けてしまうのです。

1B 父なる神

神がアダムを造られた時に、「われわれに似せて」と言われたことを思い出してください。唯一の神であられるにも関わらず、「われわれ」とご自身のことを呼ばれました。それは、三つが一つにな

っている神であられ、父なる神、子なるキリスト、そして聖霊なる神が一体となっておられ、それで一つ神なのです。そして、一つになるためには服従が絶対に必要です。「私は私、あなたはあなた」という個人主義では、絶対に個々がばらばらになります。そして、「みんなで話し合って、一つになりましょう」というのも、当たっているようで間違っています。どこかで、何らかの意見、何か統一した意見があつて、それにみな服するからこそ一つになれます。これが、コラの罪でした。モーセとアロンが自分たちの上に立っていることに腹を立てて、「すべてが聖なる者とされている」と言いました。確かに、交わりにおいて、本質において、全ての人々が等しく神に、キリストに近づきます。互いの交わりは全く平等であり、兄弟姉妹です。しかし、一つになる時には「従う」ということなくして、信頼も愛も、敬意も、平安も、何もありません。

御子であられるイエス様は、能力において御父と同一でした。何でもすることがおできになりました。しかし、どんなことも御父から離れて行われたことはありませんでした。何一つ、ご自分の意志で動きませんでした。「子は、父がしておられることを見て行う以外は、自分から何も行うことはできません。すべて父がなさることを、子も同様にを行うのです。それは、父が子を愛し、ご自分がすることをすべて、子にお示しになるからです。(ヨハネ 5:19)」「わたしは、その方が喜ばれることをいつも行うからです。(8:29)」権威というものは、一つでしかありません。二者が本質的に同質で同等であっても、権威は二つ以上存在できません。存在したら、必ず争いが起こります。サタンが、いと高き方になるろうと言ったために、神に反逆しました。同等になるろうとすることは、つまり自分が頭になるろうとすることです。何の権威もなしに、みな平等になることは決してできないのです。ですから、イエス様は父と同等で同質であられながら、なおのこと父の権威の下に服し、それゆえ一になっていることができたのです。それゆえに、父の下さる一切の権威がイエス様に与えられ、イエス様が世界を治める王となることができたのです。

2B 弟子たち

そして、イエス様は弟子たちに、父とご自分の関係を引き伸ばしたいと願われました。イエスご自身が父の権威の下におられたので、今度はご自身に付いてくるものたちがそれを引き継ぐようにされたのです。「ヨハネ 17:21 父よ。あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちのうちにいるようにしてください。あなたがわたしを遣わされたことを、世が信じるようになるためです。」父とキリストが一つであるように、彼らもご自身のうちで一つになるようにと祈られています。

そこでイエス様は、自分を捨てて、それでわたしに付いてくるようにと命じられました。「イエスは弟子たちに言われた。『だれでもわたしについてきたいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい。』(マタイ 16:24)」自分を捨てなさい、と命じられます。これは言い換えれば、心の王座に自分が着いているのをやめなさいということです。そこから立ち上がって、わたしが座るようにさせなさいということです。そして、「自分の十字架を負って」というのは何か？これは、苦しみを、痛みを負っていきなさいということではないです。十字架を負うということは、口

ローマの主権に完全に服従することです。ローマにおいて、十字架刑になるというのは、主に反逆罪です。殺人などの重罪もそうですが、反逆して人を殺したということのほうが多かったのです。つまり、ローマにどんなにもがいて反抗しようが、絶対にお前は逆らうことができないという見せしめとして、十字架刑がありました。ですから、自分の十字架を負いなさいというのは、日本語で使われるような罪滅ぼしをしなさいということではなく、服従する生活の中に入りなさいということです。

3B 教会

このような、イエス様に服従する集団が弟子たちであり、そして教会は、キリストの弟子たちによって成り立っています。すべてはイエス様です。イエス様が中心です。イエス様がこの教会の主であり、持ち主です。イエス様が教会を建て上げ、動かされます。そして、イエスを主としている弟子たちは、イエス様だから一つになれます。十二弟子の中に、熱心党員のシモンと、この福音書を書いたマタイがいます。彼は取税人です。つまり、ローマのためにユダヤ人から徴税することです。これはユダヤ人に非常に嫌われていたことです。ローマの犬と罵られても当然であると考えられていた存在です。熱心党員は、民族主義者であり、武闘派です。「復活」の映画の初めに、ユダヤ人でローマ兵と戦っている者たちがいたでしょう？メシアが来るのだと宣言して、それで殺されていましたが、彼らが熱心党員です。ローマに武力をもって戦い、メシアが来られると信じていました。だから、シモンとマタイはそりが合わないどころか、間違いなくシモンはマタイに腹を剣で刺していたと思います。それだけ、全然、違う人だったのです。なぜ一つになれたのか？イエス様が強烈な主であられたからです。

そのような集団が教会です。ですから、教会には権威が与えられています。「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。よみの門もそれに打ち勝つことはできません。わたしはあなたに天の御国の鍵を与えます。あなたが地上でつなぐことは天においてもつなぐがれ、あなたが地上で解くことは天においても解かれます。(マタイ 16:18-19)」だれが主権者であるか？イエス様です。けれども、イエス様の権威の下にいることを決めた弟子たちは、弟子たちにもイエス様の名による権威が与えられます。そして、自分たちに賜物が与えられ、奉仕が任され、そこにおいてキリストの福音によって、御霊によって変えられる人々が起こされるのです。

4B 指導者

これでようやく、御体が生きます。キリストの体があります。それぞれが、自分が権威の下にいることを知り、その中に服従することによって、それぞれに与えられた務めがあり、責任があります。ローマ 12 章 3 節から長くなりますが、8 節です。「3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがた一人ひとりに言います。思うべき限度を超えて思い上がってはいけません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深く考えなさい。4 一つのからだには多くの器官があり、しかも、すべての器官が同じ働きをしてはいないように、5 大勢いる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、一人一人は互いに器官なのです。6 私たちは、与えられた恵みにしたがって、異なる賜物を持っているので、それが預言であれば、その信仰に応じて預言し、7

奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教え、8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行う人は喜んでそれを行いなさい。」頭はキリストであり、頭なのですからこの方の主権に従い、それでそれぞれが、神の恵みによって与えられた賜物を用いて、熱心に主に仕えます。

そこで初めて、指導者が立てられていることを話すことができます。「ヘブル 13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人たちは神に申し開きをする者として、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にはならないからです。」ここから分かるかと思いますが、あくまでも指導者に従うというのは、それぞれが、主につながっており、主に仕えているという自立した存在だということです。教会があって牧師がいて、それで他の信徒が牧師に従うというような、牧師があたかも仲介者であるかのようなものでは決してありません。常に、イエス様と自分との関係が骨太としてあって、その中で立てられている指導者の言っていることを、御霊に聞きながら従っていくということでもあります。

5B 家庭や職場

先ほど話しましたように、神の恵みによって立てられているのですから、どの人が立てられていても、他の人たちはその任された人に従うのです。私は牧者ですが、これは地位ではなく、賜物であり働きです。例えば他の人が何か奉仕を任されていれば、その人が担当であれば、その具体的な事柄については、私もその人に従うのです。上下関係ではなく、権威系統の話だからです。

そこで、使徒たちの手紙には数多く、「互いに従いなさい」という教えがあります。「キリストを恐れて、互いに従い合いなさい。(エペソ 5:21)」キリスト者の生活は、愛による服従の生活が大きな特徴です。妻が夫に従いなさい。そして夫も、妻を愛することにおいて自分自身を捧げながら、主に従います。子供たちは、主にあって両親に従います。父たちも、主にあって子を教育しながら、主に従います。奴隷は、キリストにあって恐れおののきつつ、地上の主人に従います。そして、主人は、天に主がおられ、公平に裁かれるのですから、公平に取り扱うことを命じられています。生活のあらゆる側面において、主に従い、そしてそこに立てられている人々に従います。

そして、このような互いに従う関係があって、その中で神の国が広がります。イエス様が天の御国を宣べ伝え、そしてご自分の言葉によってこれから、ご自分の支配の領域を広げられます。らい病人を清められ、熱病にかかった女を癒され、悪霊に取りつかれている者たちから悪霊を追い出されました。嵐さえ静められます。これらが、すべてご自分の命令によって行われるのです。イエス様の言われていることを行なっていくことによって、自分自身から、また互いの関係から神の国が広がるのです。